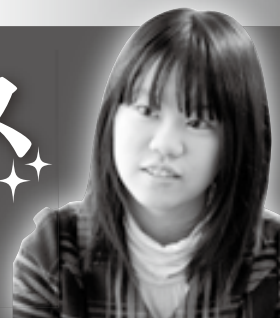


✦ 奥田あやと囲碁体験 ✦

指導者も必読！ ゼロから分かる

入門 エッセンス セミナー



奥田 あや 三段

time 5

皆さん、こんにちは。

早いもので、この入門講座も第5回となりました。

これまでの4回は、囲碁入門における二本柱とも言うべき、

- ・「地」の概念および数え方
- ・石の取り方

についてお話ししてきました。

この二本柱についての説明を読み損ねてしまった方、もう一度確認したい方は、右ページ下段のカコミに記してある「編集室からのお知らせ」をご覧ください。日本棋院のホームページ内で過去4回分の内容を確認することができます。



というわけで、今回からいよいよ実戦編です。

具体的には、これまでの4回でマスターしてきた「地の概念」と「石の取り方」をドッキングするという行為になるのですが、

めでたくこれを達成すれば、晴れて「入門卒業」となります。

そしてこれは、それほど難しいことではありません。私がこれまでにお手伝いしてきた入門者の方も、このドッキング作業でそれほど苦労はしませんでしたから。

大事なのは、あれこれ理屈で考えようとするのではなく――、

- ・とにかく実戦を多く体験すること

です。あれこれと頭で考える暇があったら、一つでも多く実戦を体験し、失敗を重ねてください。

「失敗は成功の素」という言葉がありますが、これはまさに至言で、失敗することで「ああ、こうなると駄目なんだ」ということを、頭ではなく身体で覚えることがで

Profile おくだ あや

東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第4回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

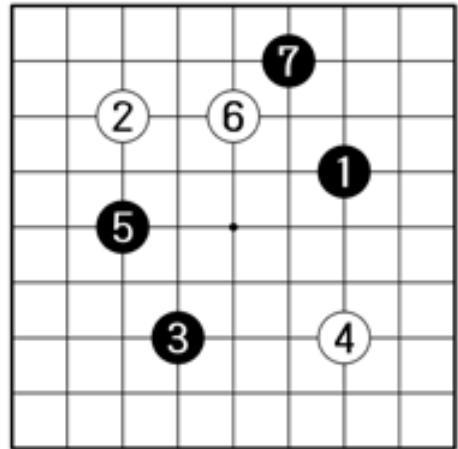
きるのです。

失敗を多く体験できた人ほど、早く上達できる——このことを信じて、どんどん実戦を重ねてください。

置碁から始めてみる

では、具体的な実戦編のスタートですが、その実行にあたっては、次の2つのケースが考えられると思います。

- ①すでに囲碁を知っている人に教えてもらいながら始める
- ②まったくの初心者同士の二人で始める



1 図

実戦編

そして今月号では、①のケースを取り上げることにしましょう。おそらく入門者の初実戦としては、この①の方が多くはないかと思うからです。

なお実力が同レベルの2人が打つ場合は1図のように黒1、白2、黒3、白4……と双方が一手ずつ打っていき、こうした対局のことを「互先」と呼びます。

対して、両対局者の間に実力差があるケースでは「置石」と言って、実力が下の

人が予め、黒石をいくつか置いてスタートするハンディキャップ制の対局方法があります。最初にいくつか石を置いていれば、それだけ有利な状況から対局を始めることができるわけで、こうしたハンディ制の対局を「置碁」と呼びます。

実力差が小さい場合は、最初に黒石を二個置いて始める「二子局」。もう少し差があったら「三子局」。さらに差があったら「四子局」と、石数が増えていくのですが、入門者が経験者に教わる初実戦では――。

★ 編集室からのお知らせ ★

本コーナーでは、4月号から入門講座を連載しておりますが、今月号（8月号）以降よりご購入いただいた場合、内容が途中からになってしまいます。そこで本講座に限っては、幣院ホームページのトップ画面中段にございます出版最新情報から「囲碁未来」誌のロゴをクリックいただき、そこからこれまでの記事をPDFにて確認できるようにしております。ぜひ新規ご購入者のみなさまにおかれましては、以下にまでアクセスいただければ幸いです。



上記のロゴをクリック

URL <http://www.nihonkiin.or.jp/publishing/mirai.html>



石を九つ置いてスタート！

2図の「九子局」がいいでしょう。

入門者である皆さんが黒石を9個置いて始めるということで、これだけ黒石だらけならば、たとえ経験者が相手でも、十分に好勝負へと持ち込むことができます。もしかしたら、人生初の対局で、いきなり勝ってしまうかもしれません。

それくらい黒が有利なハンディキャップなのですが、そこは経験者vs入門者ということで、どうしても入門者にはミスが出てしまいます。しかし圧倒的なハンディをもらっているのですから、多少のミスをして、まだまだ黒は勝つことができます。

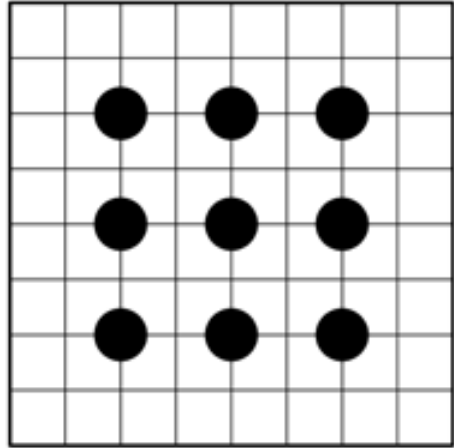
というわけで、先ほどもお話ししたように失敗を恐れず、むしろ「どんどん失敗するぞ！」くらいの気持ちで、実戦を体験してみてください。

ではその実戦例を見ていきましょう。私が入門者の方と打った九子局です。九路盤をお持ちの方は、実際に碁盤に石を並べながら手順を追ってみてください。

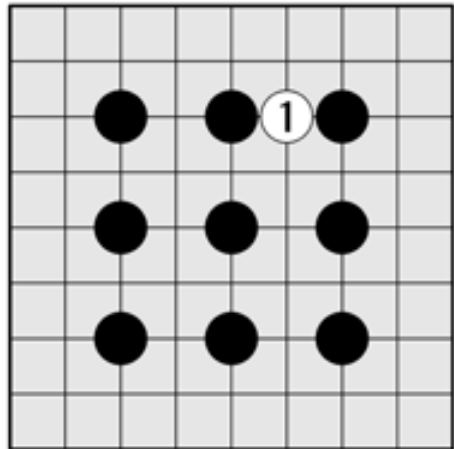
第1譜 白は1と打ってきました。どういう意図かというと「黒の構えを食い破れたらいいな」という程度の考えです。

そしてこの時に黒は、どう考えればいいのか？ とにかくこれだけ黒石の援軍がいるのですから、現在は圧倒的に黒有利な状況であることは間違いありません。従って、「この白を取ってやろう！」と考えてしまって構いません。むしろそのように考えていただきたいのです。

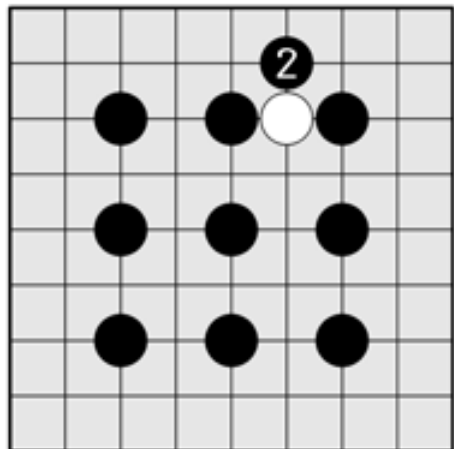
ではどうすればいいのかというと、まずは「相手の石をアタリにすること」ですよね。従って実戦の入門者さんも**第2譜**の黒2と、白石をアタリにしました。



2図



第1譜



第2譜

アタリにされたわけですから、白は当然ながら**第3譜**の白3と逃げ、黒は4と打ちました。「白二子を取る」という意志が感じられ、好手と言っていいでしょう。

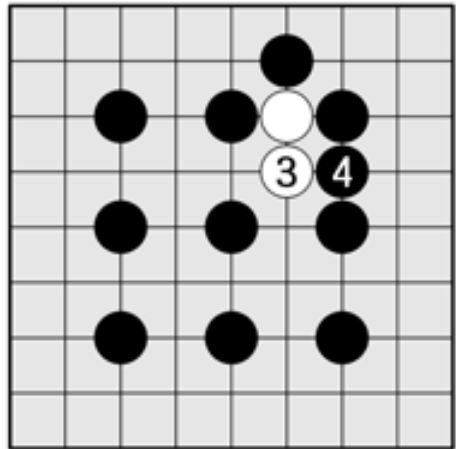
繰り返しますが、黒にはとにかく援軍がたくさんいます。こういう状況下では、積極的に戦いを挑みましょう。たとえ経験者(うわ手)の石であろうと、強気に相手の石を取りに行っていくということです。

そしてこの「援軍の多い場面では積極的に打つ」という法則は、皆さんが今後強くなっていても決して変わることのない囲碁の鉄則ですので、しっかりと心に留めておいてくださいね。

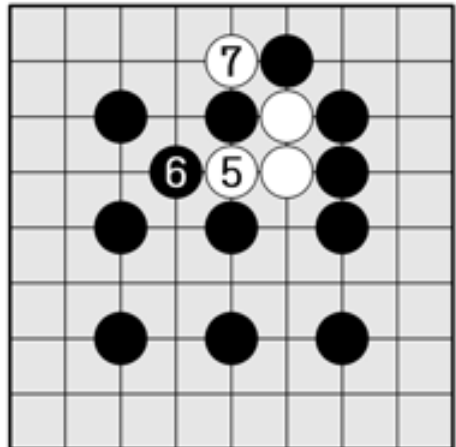
続いて**第4譜**。白5、黒6、白7という進行となりましたが、ここで黒がどう打つか、非常に重要な一手となります。

実はこの場面、黒が最善手を打てば、勝負はここで決まってしまうかねないくらい大事な局面なのです。ページをめくる前に、ぜひその手を発見してください。

先月号で勉強した「取るか取られるか」が、こういう場面でこそ役立つのですが……。



第3譜



第4譜

***** 九路盤セットと十三路盤セットのご紹介 *****

十九路盤のセットはお近くのおもちゃ屋さんや、小売店などで比較的簡単に購入できるが、九路盤や十三路盤セットとなると、店頭でみかけることは難しい。東京、大阪、名古屋ならば、日本棋院の東京本院、関西総本部、中部総本部があるのでぜひ一度足をお運びいただきたい。

遠方の方にご利用いただきたいのはインターネットを使った日本棋院オンライン囲碁ショップや、電話注文・FAX注文対応の通信販売である。

写真①の九路盤セット(¥1,470)は、裏は七路盤として、また写真②の十三路盤セット(¥5,250)は裏は九路盤としても使え、さらに携帯性も抜群でお値段も手ごろ。まさに囲碁の入門キットとしてはうってつけの人気商品だ。



①九路盤セット ¥1,470



②十三路盤セット ¥5,250

- 本院
千代田区五番町7-2
JR・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩1分
- 八重洲囲碁センター
中央区八重洲1-7-20 八重洲口会館9F
(東京駅/八重洲地下街直通)
- 関西総本部
大阪市北区角田町1番12号
阪急ファイブアネックスビル6F
- 中部総本部
名古屋市中区榑木町1-19
- 日本棋院通信販売センター
TEL 03-3288-8788 (平日9:00~17:00)
FAX 03-5275-6844 (年中無休 24時間受付)
- 日本棋院オンライン囲碁ショップ
<http://www.rakuten.co.jp/nihonkiin/>

双方のアタリをいかに見抜くか

3図 黒1と白三子をポン抜いてしまうのが正解です。盤上から白石3個を消去してしまうのですから、こんなに有効で簡明な手段はありません。

こう打たれてしまったら、白はもうお手上げですね。このあと白aなどと手を付けていっても、右上と同じ結果になるでしょうから、黒1とポン抜かれたら、私はもう「負けました」と頭を下げることにしています。

このように途中で負けを認め、ギブアップすることを「投了」と呼び、勝った側の「中押し勝ち」という表現をします。従って3図の結果を囲碁的には「白が投了したことで、黒の中押し勝ちとなった」と表現することになります。

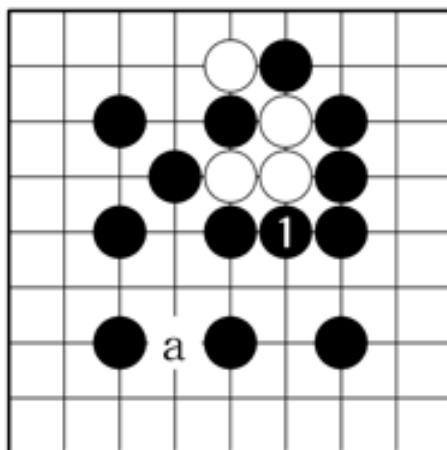
というわけで、黒1と打たれたら私は即座に投了するつもりでいて、それを期待してもいるのですが、実際はというと、なかなか黒1とは打ってくれません。

第5譜 黒8と打ってしまうのです。この碁でもそうでした。

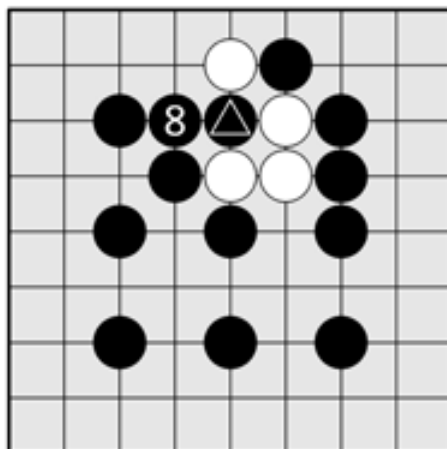
これはどういう手かという「▲がアタリになっているので、それを防いだ」との意図なのです。

でも、つい先ほどまでは、白を取りに行っていたはずですよ。それが「▲がアタリになっている」ことに気づいた瞬間「白を取りに行っている」という本来の目的を忘れてしまった——だから黒8と打ってしまうのでしょうか。

そしてここで大事なのが「3図の黒1とポン抜いても、白が黒一子を取る手を防いでいる」という点です。第5譜の黒8と打っても防ぐことができますが、どの道防



3図



第5譜

ぐのであれば「白三子を取りながら」の方が得で、紛れがなくなることは明白ですよ。ね。

つまり第5譜の黒8は「自分の石を取られたくない」という恐怖心ばかりが前面に出てしまい、本来の目的であった「白を取る」ことを忘れてしまった行為に他なりません。

先月号でもお話しし、練習問題も出題しましたが、囲碁の対局においてはこのように「お互いの石がアタリになっている」という状況が頻繁に発生します。

その時に「自分の石がアタリになっている」ことを見抜く警戒心はもちろん大事ですが、同時に「ここに打てば相手の石を取ることができる」ことを見抜く前向きな視点も必要です。

逆もまたしかりで、相手の石を取ることばかりを考えていると、いつの間にか自分の石がアタリになっていて「ギャッ！」ということも……。

最初はなかなか「双方からの視点」を持つことができず、どちらか一方に偏ってしまいがちです。

しかし対局を重ねていくことによって、こうした課題は改善されていきます。だからこそ、とにかく実際の対局を数多く重ねることが、上達する上では欠かせない要素なのです。

と、いろいろ言いはしましたが、実は第5譜の黒8が悪い手というわけではなく――、

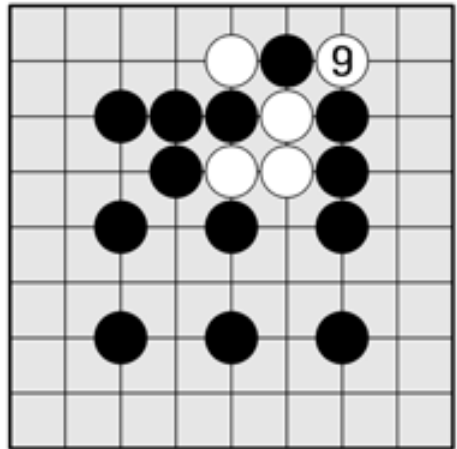
第6譜 白9と打たれた時に、黒が正しい手を打てれば問題ありません。

その正しい手とは――、

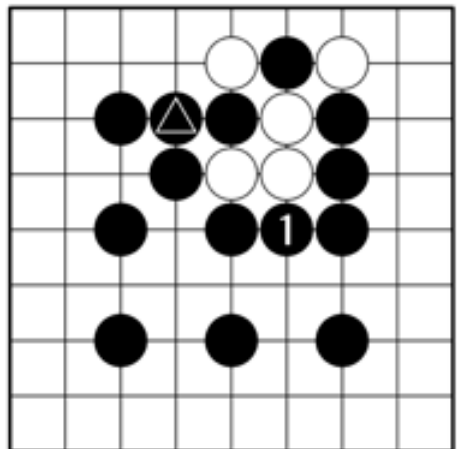
4図 黒1のポン抜きですね。こう打たれたら、やはり私は投了するつもりなのですが、一度▲と打ってしまった人は、まず黒1とはポン抜いてくれません。

第7譜 黒10と逃げてきます。この手も「白三子がアタリになっている」ことを忘れてしまい「▲を取られたくない」との意識に縛られてしまった手と言うことができるでしょう。

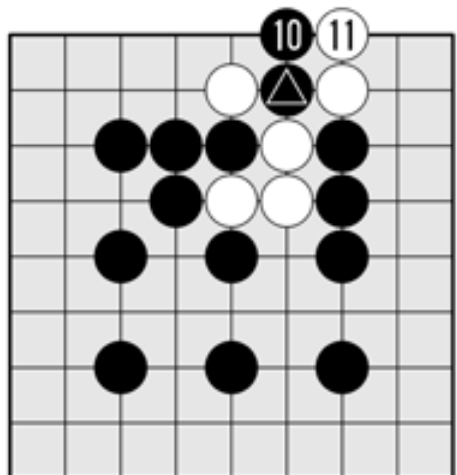
しかし厳密に言えば、この手も悪手というわけではありません。そして白11の 때가 黒にとって最後のチャンス――ページをめくる前に改めて、黒の次の一手を考えてみてください。



第6譜



4図



第7譜



これまでの説明もあったので、もうお分かりとは思いますが――、

5図 黒1が正解で、白三子をポン抜くことができます。

先の3図や4図と同様、黒の利益は莫大で、白としてはもう挽回の手立てがないので、投了するしかない形です。

とはいえ、実戦で5図の黒1と打てる人はほとんどいません。「白の三子をアタリにしている」ことを忘れ「自分（黒）の二子がアタリになっている」という点にのみ意識が行ってしまっているので――、

第8譜 黒12と逃げ、白13と取られてしまうのです。初めて囲碁を打つ方と九子局を打つと、8割以上の確率でこのような結果となります。

本来、相手の石を取っていたはずの所で逆に自分の石を取られてしまったのですから、黒の失敗は明らかですね。

しかし――というのが、実は今月号における最重要テーマなのです。

囲碁はあくまで 地の多い方が勝ち！

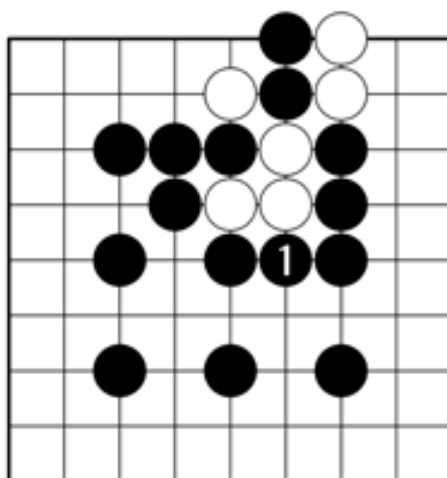
第8譜の白13となった形を、改めて**6図**として掲げました。この状況で、碁盤全体をもう一度よく眺めてください。

どちらの地が多いと思いますか？

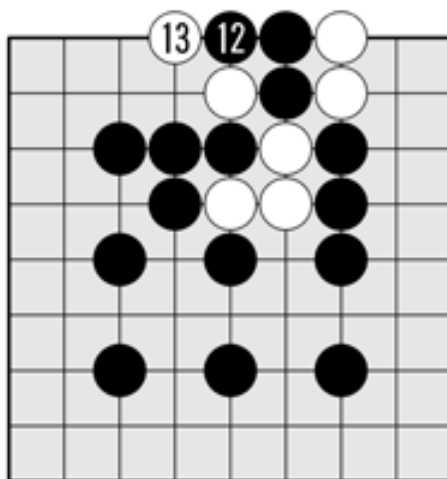
黒ですよ。

確かに上辺では黒が失敗しましたが、その結果としてできた白の地は大した大きさではありません。そして黒石を3個取られたとはいえ、それはあくまで「最後に黒地を3目埋められるだけ」です。

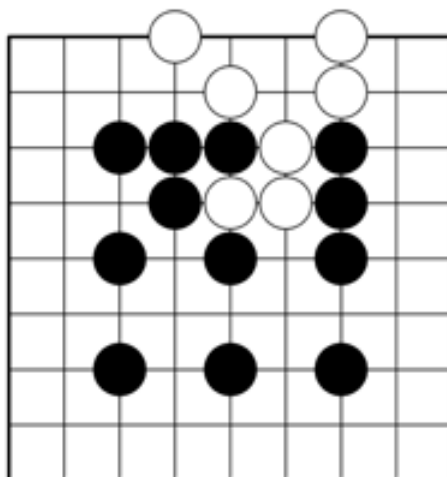
それを考えれば、碁盤の下半分は黒の大勢力圏。まだまだ黒が圧倒的に優勢であることがお分かりいただけだと思います。



5図



第8譜



6図

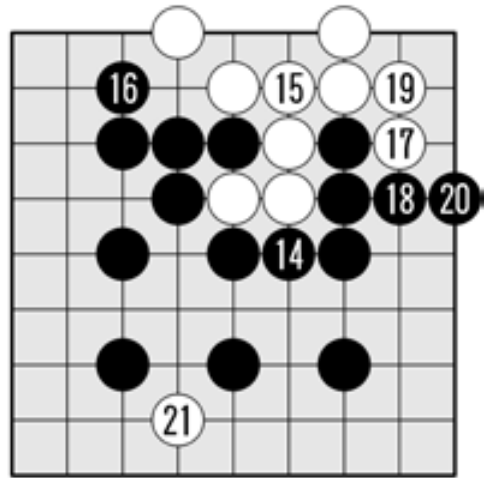
「石を3個も取られてしまったからもう駄目だ」ではなく「まだ3個しか取られていない」なのですね。これが九子局のハンディの威力というものなのです。

というわけで、黒は何も悲観することはありません。その点を説明してあげたところ、この入門者さんは気を取り直して**第9譜**の黒14と打ちました。

次に黒15と打たれると白三子を取られてしまうので、白は15と守りました。そして黒16は「これ以上、左上隅方面に侵入されないように」という意図で、素晴らしい好手でした。

白17、19に対する黒18、20も「右下方面への侵入を防ぐ」との意図で、このあたりは「碁盤の下半分を自分の地にしよう」という目的意識が窺えるので、初の実戦にして早くも「囲碁というゲームを理解している」ことが伝わってきます。

そしてこのまま囲い合ったのでは、白の



第9譜

負けが必定——ということで、私は白21と左下隅への潜入を試みました。

というところで今月号は終了です。

皆さんはぜひ来月号までに、白21に対する黒の応手を考えておいてください。正しく打てば、この白を取ってしまうことができますので……。

指導者の方へ

「地の概念」と「石の取り方」を説明しただけで、今月からいきなり実戦編に突入——ずいぶん乱暴な進め方だと思われた方もおられるでしょう。

しかし、これで大丈夫なのです。これだけでも十分に入門者は、実戦の感覚を理解してくれるのです。

まずはとにかく「実戦の流れ」および「どうなったら終局なのか」を掴んでもらうことを最優先——「石の生き死に」や「コウ」などは、そののちに覚えてもらえばいいことなのです。

極端な話、たとえ一眼であったとし

ても、両者が「地」だと認識したのなら、それは立派な「確定地」です。それを「実はナカデというものがあるね～」とやってしまうと、入門者はもう付いていけません。

死に残りだろうとカケ眼だろうと、入門者への指導で最優先すべきは「終局を理解してもらうこと」です。そこをクリアし、実戦を重ねていけば、こちらが教えなくても「あれ、この石って取ることができるのでは？」と気付いてくれるものなのです。

教え過ぎは、初心者やる気をそぐだけです。とにかくたくさん失敗を経験させてあげてください。